

## 編集委員会便り

私は62年度で編集実行委員を辞任し、飯島孝志氏を後任に推薦したが、産業側委員で本研究会発足以来関わっているのはお前だけだから通巻50号記念号の編集委員会便りに一文を書くよう要請された。

第1回の編集実行委員会は昭和55年4月であったかと思うが上司であった小川博通氏の代理として出席し、以来57年までピンチヒッター、57年の半ばから正式の委員になった。編集委員の役目は、各号の論説、展望・解説、特集等の記事の主題を選び執筆者を決めることである。主題は事務局が会員の皆様にお尋ねしたアンケート結果が整理されていて、そこから選ばれることが多いが、その論題の領域の広さと知識の範疇の多様さには常々驚かされる。エネルギー・資源という学問、技術は極めて学際的、また業際的なものであるから当然ともいえるが、ここで驚異と思うのは、本誌を読まれる会員諸氏もご同感と思うが、この多様に広がった分野の論題に対して最適の執筆者が選ばれ、オリジナリティがあって、而も分かりやすく、また適度の深さがある論文に仕上がることである。これらは執筆の諸先生が優れていることは勿論であるが、歴代の編集委員長、副委員長にリードされる編集委員の諸先生が、如何に各分野で卓越の方々であるかということでもある。そのような方々の集まる編集委員会であるから、出席の度に私自身は己の知識の偏狭さ、浅薄さが身に沁みて、不適任であると痛感し続けであったが、非常に勉強になるので、御迷惑をかけているとは思いながら、今日に至ったものである。

本誌が創刊された昭和55年はソーラー元年と言われ、輝かしい代替エネルギー時代が到来すると期待されていた。しかし翌年には石油価格上昇が緩み、ブライトンでの国際太陽エネルギー学会では、特に熱利用技術の陰りを感じた。企業の研究所で太陽熱利用技術に中心を置いていた私にとっては、販売あるいは納入されつつあるもののサポートとチームメンバーの転進を同時に考える苦しみの始まりであった。

オイルショックの最中でもエネルギー問題は経済現象と言われる先生もおられた。民生用機器を主とする製造業に属する我が身であるから、研究開発はご使用者の経済に貢献することが第一である。一方技術者として、いずれ枯渇する化石エネルギーや資源に備えて技術開発を行う義務を国家、あるいは大袈裟に言えば未来の世界人類に対して負っている。研究開発を続行する為には評価の尺度が必要であるが、この尺度が経済だけでは推進力が弱い。経済の微分値はほとんど確実に3年サイクルで振動し（金森久雄：経済を見る眼）その要因は極めて多岐に亘り、また人為的影響も大きいように見える。積分値は大抵は単調に増加している。コンピュータの計算速度、記憶能力等に相当する継続的、絶対価値的な尺度はエネルギー関連技術には無いのだろうか。そのような尺度を考えるために、エネルギー技術のこれまでの進歩における歴史的、および技術的必然性についての論説があればと考えている。

穂 積 史 郎

松下電器産業(株)中央研究所

エネルギーグループ 主幹研究員

